塵労

芥川龍之介

或春の午後であつた。私（わたし）は知人の田崎（たざき）に面会する為に彼が勤めてゐる出版書肆（しよし）の狭い応接室の椅子（いす）に倚（よ）つてゐた。

「やあ、珍しいな。」

間（ま）もなく田崎は忙（いそが）しさうに、万年筆を耳に挟（はさ）んだ儘、如何（いかが）はしい背広姿を現した。

「ちと君に頼みたい事があつてね、——実は二三日保養旁（かたがた）、修善寺（しゆぜんじ）か湯河原（ゆがはら）へ小説を書きに行（ゆ）きたいんだが、……」

私は早速（さつそく）用談に取りかかつた。近々（きんきん）私の小説集が、この書肆から出版される。その印税の前借（ぜんしやく）が出来る

やうに、一つ骨を折つて見てはくれまいか。——これがその用談の要点であつた。

「そりや出来ない事もないが、——しかし温泉へ行(ゆ)くなぞは贅沢(ぜいたく)だな。僕はまだ臍(ほぞ)の緒(を)切つて以来、旅行らしい旅行はした事がない。」

田崎(たざき)は「朝日」へ火をつけると、その生活に疲れた顔へ、無邪気な羨望(せんばう)の色を漲(みなぎ)らせた。

「何処(どこ)へでも旅行すれば好(い)いぢやないか。君なぞは独身なんだし。」

「所が貧乏暇なしでね。」

私はこの旧友の前に、聊(いささ)か私の結城(ゆふき)の着物を恥ぢ

たいやうな心もちになつた。
「だが君も随分長い間、この店に勤めてゐるぢやないか。一体今は何をしてゐるんだ。」
「僕か。」
田崎は「朝日」の灰を落しながら、始めて得意さうな返事をした。
「僕は今旅行案内の編纂をしてゐるんだ。まづ今までに類のない、大規模な旅行案内を拵へて見ようと思つてね。」

底本：「芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
１９７１（昭和46）年10月５日初版第５刷発行
入力校正：j.utiyama
１９９９年２月15日公開
２００３年10月７日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。